

むかしの大阪湾

鉄道や飛行機がまだない時代には、船で人や物が行き来していました。港に恵まれた大阪湾のまちは港とともに発展してきました。

古代の難波(大阪)のにぎわい (4~5世紀ごろから)

古代の政治の中心は、海のない飛鳥・奈良でした。この飛鳥・奈良に近かった難波(今の大阪)には、難波津という港があったため、日本各地や中国大陸、朝鮮半島などの国々から人や物が集まり大変にぎわっていました。



5世紀後半ごろの難波津周辺の様子



復元された5世紀の大きな倉庫

中世の自由都市、堺 (14~16世紀ごろ)

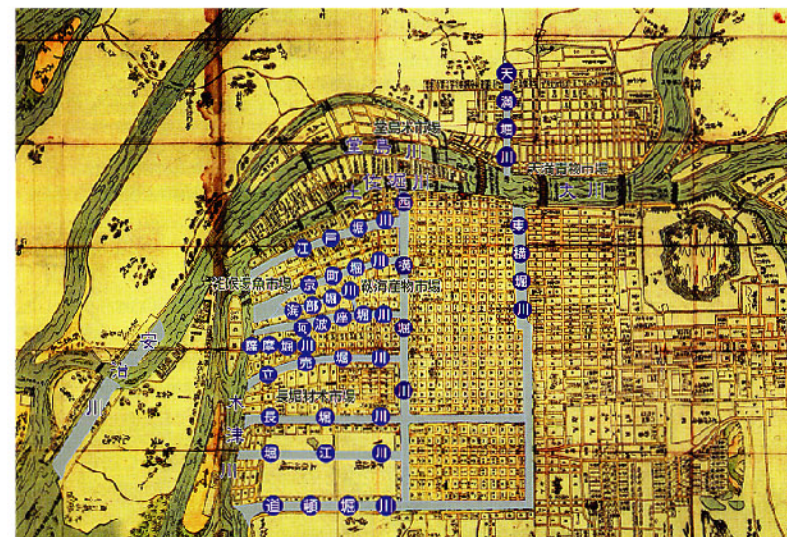
中世に貿易の中心地になった堺では、商人が中国大陸、朝鮮半島、東南アジアの国々などとの貿易により大変なお金持ちになりました。お金持ちになった商人は、その力で自分たちの町を自分たちで治めるようになりました。



桃山時代に描かれた南蛮屏風 (堺市博物館所蔵)

「天下の台所」とよばれた大阪 (16世紀後半~18世紀)

大阪を領地にした豊臣秀吉は大阪城をつくとともに、大阪の町に堀川(運河)を掘り、船で町の中まで物が運べる基礎をつくりました。江戸時代に入ってから、運河は掘り続けられ、その運河を通して全国各地から船で米や特産物が大阪に集まり、大阪は「天下の台所」といわれ大いに栄えました。



元禄年間(1688~1703年)の大阪の地図(なにわの海の时空館資料)

開港とともに栄えた神戸 (19世紀後半ごろから)

明治の初めごろに海外に港を開いた神戸は、港のそばに外国と商売をする商館が立ち並び、そこに出入りする多くの外国人や日本人でにぎわいました。その後、日本と外国との貿易がますます盛んになり、神戸は港を中心に大きく発展しました。



二代長谷川貞信が明治4年に描いた神戸の海岸の様子(神戸市立博物館所蔵)